

私の雑想ノート No.10



パストガバナー
塚原 房樹
(札幌東RC)

アメリカの職業奉仕観の底流にある思考

キリスト教の根底にあるものは「禁断の木の実」を食べたアダムとイブの原罪説です。ピューリタニズムでは墮落した人間はどんなに修養を重ねても許されません。特にロータリーの背後にある厳しいカルヴァンの訓えは、彼らにとってこの世は涙の谷であり、やがて終わるべき旅路に過ぎません。しかも彼らは神の栄光を増すためにこの世を少しでも神の国に近づけようと努力し、それが神に許される証となるのです。こうしてこの短い人生の旅路はやがて終わるのだから我々は昼のうちに仕事をしておかねばならないという緊迫した気持ちを生みます。この世の楽しみを捨てて、すべてを隣人愛の実践にささげねばならないという巨大なエネルギーがほとばしり出ることになりました。そして経済活動を、神の栄光をたたえ、隣人愛を実践する手段と考えました。

日本の社会は東洋哲学(神道・仏教・儒教)が人々の生活を律してきました。特に儒教ではこの世と人間との関係は徹底した楽観主義に立っています。つまり儒教の考え方によると、この世は様々な世界のあり方の中で最上のもの、そしてキリスト教と全く逆に、人間の本性は善であり、修養すれば仏にもなれます。儒教の目指す人間の理想像は君子という表現で示されます。君子は徳が高いといわれていますが、それは道に従うことであり、この道とは一定の理法に従う世界秩序のことです。つまり人倫の道に従うことがこの世で目指す理想となります。儒教ではそうした外面的な作法、世間体を出るだけ守り、そのために自分を抑制します。

このように信ずる宗教の違いにより奉仕観に決定的な差が生じます。儒教での罪は秩序と調和を破ることであり、それは償いうる過ちであって、キリスト教の原罪といったものとはあまりにも遠くかけ離れています。またアメリカと奉仕観が大きく違うもうひとつの理由は日本にはパブリックという横の概念がなかったことです。社会は身分的な縦の人間関係で成立していました。

日本の縦の人間関係では人間の相互関係が働くボランティアの生まれる余地はなかったのです。日本人の控えめな態度を美德とする生き方にとって、ボランティアはそれを超越する精神的エネルギーを必要とするものでした。外来思想のロータリーが我々にもたらした一番大きな功績は、ボランティアというと単に「困った人を助けてあげる」ことだと思っていたが、むしろ「助けられているのは自分」の方だという新しい価値観を積極的に我々に与えてくれたことです。